

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 29 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320059

研究課題名(和文) モンロー・ドクトリンの行為遂行的効果と21世紀グローバルコミュニティの未来

研究課題名(英文) Monroe Doctrine and its Performativity in the 21st Century

研究代表者

下河辺 美知子 (SHIMOKOBE, MICHIKO)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：20171001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,700,000円、(間接経費) 2,910,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はモンロー・ドクトリンの文化的・政治的意味を検証してきた。モンロー大統領の言葉は歴史を通して行為遂行的効果を発揮し、西半球・東半球という概念を喚起した。この洞察は19世紀アメリカの政治的無意識への理解を深め、20世紀ポストコロニアル研究へ有効な視座を与え、球体として地球を見直す新たな視点につながり21世紀の世界情勢分析のための有効な概念であることが証明された。研究成果は、国内海外の学会発表(61件)、論文(41件)著書(31件)として発表されており、2014年3月にはシンポジウムを行った。テロと核を抱える21世紀世界における惑星の共存への提言として成果物出版計画が現在進行中である。

研究成果の概要(英文)：Our collaborative research has consistently examined the cultural and political implications of the Monroe Doctrine (1823). History convinces us that President James Monroe's speech act conjured up and naturalized the Western and Eastern hemispheric imagination. This insight helps us comprehend not only the political unconscious of Victorian America but also the post-colonialist viewpoint of the 20th century, enabling us to reconsider the new global reality, that is, the "globality" more visible in the 21st century. This perspective induced the members of the research group to deliver a variety of papers at conferences in Japan and the US, publish quite a few articles and books, and hold a final symposium "The Monroe Doctrine Reconsidered" at Seikei University on March 29th, 2014. We also plan to co-edit a book of essays suggesting the possibility of planetary symbiosis in the new century still being menaced by terrorism and nuclear power.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 英米・英語文学

キーワード：モンロー・ドクトリン 惑星思考 半球思考 大衆文化 南米 環太平洋 島と大陸 ミュージカル

## 1. 研究開始当初の背景

2010年に本研究を開始したときは、9.11後のアメリカ社会と世界との関係をあらためて問い直し、グローバリズムの本質を21世紀社会という文脈の中でとらえる方策をさぐりたいという動機がプロジェクトの基盤であった。従来、アメリカ研究の流れの中では、アメリカという主体の形成過程を追う言説が主流であったが、本研究ではアメリカと非アメリカとの境界の規定法についての新しい枠組みを探りたいという予測をもって出発している。

そうした議論のためには、アメリカ的自己決定のレトリックとして機能してきた「モンロー・ドクトリン」を研究の軸に据えることが有効であるという確信があったが、その理由は、1823年、第七回年頭教書としてモンロー大統領の口から発せられて以来、「モンロー・ドクトリン」はアメリカ国家の中で変奏され続け、その結果、「世界におけるアメリカ合衆国の位置に意味を持たせるための語り口(narrative)を提供」(Grechen Murphy)してきたからである。

19世紀の政治言説を分析することで20世紀のアメリカの位置をさぐり、その上で、テロや核という問題に全世界が対処をせまられる今、21世紀の国際関係へ新たな提言を行いたいというのが研究開始時点の希望であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、「全体性」を志向する欲望と「部分」であることへの苛立ちの相克にたいしてアメリカ国家・文化がどのように歴史を刻んできたかを現代批評の最前線の洞察から明らかにしようとした。ことに19世紀初頭にアメリカの外交政策方針を示したとされるモンロー・ドクトリンに注目し、この言説がアメリカ国家の空間的・時間的位相を作り出してきた歴史的経緯を検証し、それによって、アメリカ文学・文化研究の重要性をグローバル規模で確認ことが目的であった。

近年、アメリカの批評界ではアメリカ研究という地域研究の枠を「半球思考」という大陸間の視野の中に設定し、さらには「惑星としての地球」という視野にも広げようとする動きが盛んである。本研究はそうした流れの中であって、アメリカ文化の諸相(文学、演劇、音楽他)の中で、モンロー・ドクトリン的言説効果がどのような形をとって表れているかをさぐり、19世紀後半から21世紀までのアメリカ文学を、環大西洋・環太平洋の規模で読み直すことを目指した。

目的は大きくわけて二点であった。

成蹊大学アジア太平洋研究センタープロジェクト成果本『アメリカン・テロル』で論じた「恐怖=テロ」という心的ダイナミズムを、今度は「欲望」という点から読み替えて

アメリカ的内包運動に対する新たな解釈を目指すこと。

従来、西へ向かうとされているアメリカ的欲動の陰に、南へ向かう内包衝動が別に蠢いていた可能性を探ること。

西漸運動が、理想主義の認可を受けた上での表向きのアメリカ的自己拡張運動であるとするれば、南へ向いた垂直方向の拡大は、アメリカ文化の中で抑圧された欲動によって推進されてきたものである。同質性で空間を充満させようとするのが共同体の欲望であるとするれば、逆に異質なものの監視と排除の心理を分析するとき、そこに「恐怖」の本質が見えてくる。『アメリカン・テロル』では、排除された側が内部の他者として恐怖=テロの火種を蓄積する驚きを「内なる敵」として議論の俎上にのせたが、本研究では、外なる他者を内に取り込もうとする欲望そのものに目をむけてその恐怖の発生源をつきとめるのに、南へむかって同質性を広めようとする半球思考によって検証することを目的とした。

以上二つの目的を達成するために梃子として使用したのが、モンロー・ドクトリンの行為遂行的効果である。一見、西半球(二つのアメリカ大陸)を東半球(ヨーロッパ)から独立させ干渉を受けないようにという保護のレトリックと見えるモンロー・ドクトリンには「北アメリカが南アメリカを支配していく構想が封じ込められて」(異)おり、アメリカ的単独主義は帝国主義的欲望への燃料となっている。

アメリカが自己の領域を規定する言説のもととなったモンロー・ドクトリンの歴史的効果を、19世紀-21世紀の政治的言説の中で分析し、それが、文学的ナラティブとして各時代に反復される時、どのような政治状況の心的ダイナミズムを反映しているかを検討するのが本研究の目的であった。その際、レトリック分析に加え、精神分析的アプローチ、人種の言説への洞察、演劇・芸能・音楽についての研究などを取り入れて、政治・文化の総体として地球規模の空間における「アメリカ」の意義と効果とについて学際的な考察を提示することを目指して本研究を開始した。

## 3. 研究の方法

本研究は研究代表者および三人の研究担当者による個人ベースの研究と、研究会や講演会・シンポジウムの開催を通じての研究成果の発表・知見のすり合わせという二つの部分から行った。各人が専門とする分野において研究を深化させていき、その成果を持ち寄ることで共通の思考の枠組みを生み出すことが、複雑化し混迷の度を深める21世紀の国際関係において人文科学研究のなすべき責務についての学際的提言を行うために必要であったからである。

四年間の研究期間の前半は個人ベースの研究に重点を置き、後半は知見のすり合わせ・各人の見解についての批判的検討により多くの時間を割くという方法を設定した。結果的には4人相互の間の討論は共同でのシンポジウム開催など後半にかけて密に行ったが、一方、個人ベースの研究も最終年度にいたるまで四年間を通して活発に行われたことは業績リストからも明らかである。

方法としては以下の四点にまとめることができる。

隣接領域を取り入れた学際研究をその存在価値としてきたのがアメリカ研究であるが、本研究は、隣接領域の学問分野を横断するだけでなく、研究対象を俯瞰する立場そのものを大陸間という惑星規模に置く。

政治・軍事のレトリックで語られるべき状況に、文学批評的洞察から光をあてる。アメリカという国民国家を成立させてきた「同一性」とは、言葉によって理念の上に捏造されてきたと考えられるため、文学研究の手法、および、文学研究で扱うテキストが、アメリカ国家の「半球思考」を解明する有効な手段となった。

テロ＝恐怖の諸相にせまる際に用いた精神分析的洞察をさらに深める議論をする。国民国家形成とその発展・拡張の流れの中、理念をもとに言葉で同一性を作り上げてきたアメリカ国家は、言葉からもれていくものを切り捨ててきた。それは、自己の内部の他者として国家の深層に潜在し、テロへむかう欲動となり、恐怖と攻撃性の二つの形として現れてくる。こうしたダイナミズムを解明するには、精神医学の概念が必要であり、かつ、精神医学の言語こそが、半球思考の底に宿る国家の欲望と境界の不安とに届くのである。

合衆国という国家を西半球の規模で捉えなおした後、国家的同一性を語る危険と暴力とに対する文学的・精神医学的洞察をさぐり、その成果を21世紀社会へ届け、人文科学研究が現実社会にできる具体的提言をすることを本研究の方法の最終手段とした。

最後に、大学の壁を越えて研究組織を編成するという方法であるが、結果的にはこの方法は有効であったと言える。下河辺は共同体の恐怖と不安についての精神分析的洞察、巽は惑星思考とアメリカ文学、舌津はポピュラー音楽と文学テキストの相互侵犯、日比野は1920年代から1950年代の映画・演劇・大衆文化とそれぞれの関心は異なるものの、いずれも19世紀後半から現在にいたる合衆国のアイデンティティ形成において、モンロー・ドクトリンの行為遂行的効果が「半球思考」の実現化に重要な役割を果たしているという認識を共有している

#### 4. 研究成果

四年間の研究期間を終えた時点で全体的な研究成果としては以下の三点を挙げてお

きたい。各々の点において実際にはどのような業績として発表されたかについては、その後説明していく。

(1) モンロー・ドクトリンの文化的・政治的意味の歴史的検証の結果、モンロー大統領の言葉がアメリカ社会・政治・文化において19世紀以降21世紀に至るまで歴史を通して行為遂行的効果を発揮したことが検証された。

(2) 本来政治文書として扱われ研究されてきたモンロー・ドクトリンの言説を、本研究では文学研究の手法、精神分析的洞察、大衆文化研究への影響関係などからのアプローチで分析した結果、こうした人文研究ことに文学研究や批評理論の手法が有効であることが確認された。

(3) 西半球・東半球という概念が喚起したレトリックは19世紀アメリカの政治的無意識への理解を深め、20世紀ポストコロニアル研究へ有効な視座を与え、球体としての地球を見る視点につながり21世紀の世界情勢分析のための有効な概念であることが証明された。

本プロジェクトのテーマについて以上のような研究成果を得たが、これらの成果は以下の五つの場（研究会、シンポジウム、雑誌論文、学会発表、図書）においてまとめられ、発表された。

#### (1) 研究会

大きく分けて三種類の研究会を行った。各専門領域の研究者を招きモンロー・ドクトリンに関連した研究発表を行ったもの。アメリカ文学のテキストを中心として、それを専門とする研究者に基調発表をしてもらったのち、一つのテキストについて3人の若い研究者が発表するワークショップ形式のもの。国内外の学会、研究会に共催したもの。以下にその情報の一部を記す。

4年間で計7回行われた。その中からいくつかを挙げておく。

2010年7月6日：西崎文子（東京大学）「モンロー・ドクトリンの歴史～モンローからG.W.ブッシュまで」

2011年2月21日：細谷広美（成蹊大学）「チャイニーズ・ボックスとしてのネイティヴバルガス・リョサとウチュラハイ事件を中心に」

2012年2月5日：小野俊太郎（成蹊大学）「最高経営責任者ターザン 米西戦争とローズヴェルトのインパクト」

2013年7月30日：岡田泰平（静岡大学）「植民地を描き足すこと：アメリカ植民地期フィリピン（1901～1941）の地理・歴史教育にみる地理区分の変遷」

2013年5月6日：中井亜佐子（一橋大学）「世界文学とユートピア：J・M・クッツェーの21世紀」

2014年1月13日：竹谷悦子（筑波大学）「ブ

ラック・パシフィック・ナラティブ：大戦間の地理的理想力とアフリカ系アメリカ文学」は計 4 回行ったが 1 つだけ挙げておく。2013 年 11 月 23 日 基調発表 西谷拓哉(神戸大学)「メルヴィルと環大西洋：往還するディプティック的理想力」ワークショップ発表：加藤恵梨香(立教大学大学院)田ノ口正悟(慶應義塾大学大学院)菅原大一太(成蹊大学非常勤講師)

共催としては、2010 年 11 月 10 日「アメリカン・ルネサンス 70 周年」日本アメリカ文学会東京支部 12 月シンポジウムへの共催、2012 年 10 月 26 日 ニューヨーク市立大学大学院人文学センター (Center for the Humanities, Graduate School of the City University of New York) で開催された第 2 回研究会 (Cathy Caruth) の企画・司会・共催などがある。

#### (2) シンポジウム

本研究のテーマをもとに、研究代表者および研究分担者が企画、発表したシンポジウムが行われ大いに成果をあげた。

2013 年 11 月 1 日 “Legacies of Paul de Man” (Pacific Ancient Modern Language Association) 企画下河辺、講師巽

2013 年 5 月 26 日「惑星的理想力」(日本英文学会全国大会シンポジウム) 企画・司会・講師下河辺

2014 年 3 月 29 日「21 世紀のモンロー・ドクトリン」(当プロジェクト最終成果発表のためのシンポジウム) 司会・講師下河辺、講師巽、舌津、日比野

#### (3) 雑誌論文

研究代表者、研究分担者の四人の雑誌論文寄稿の成果については以下でリストを挙げているが、このリストはスペースの関係から全論文数の一部であることをおことわりしておく。レフリーのある雑誌への掲載も多く、また、日本語論文に加えて英語論文の数も 4 名で計 5 点に上っており、海外で発行された雑誌に掲載された論文もあることをことわっておく。

#### (4) 学会発表

研究代表者、研究分担者の四人の学会発表の成果については以下でリストを挙げているが、このリストはスペースの関係から全発表数の一部であることをおことわりしておく。国内の学会、研究会での発表は、本研究テーマであるモンロー・ドクトリンのグローバル化における意義を学会に普及しアメリカ文学・文化研究を刺激したと思われる。一方、海外での研究発表が多いことも注目に値しよう。2013 年 6 月の Ninth International Melville Conference では四名のメンバーのうち三名(下河辺、巽、舌津)が研究発表を行ったが、それに加えて、2015 年の Tenth International Melville Conference の東京開催を推進する委員会のメンバーとして活動することになり、現在準備が進められている。

19 世紀の代表的アメリカ文学作家である Herman Melville は近年、環大西洋の視座に加え、環太平洋の視座から読み直されており、モンロー・ドクトリンのアメリカ的意義をメルヴィルの作品で追及し、本研究の成果を国際的にしらしめる機会となるはずである。

#### (5) 図書

研究代表者、研究分担者の四人がかかわった著書のリストは以下の通りである。また、本研究がその成果の発展として始まった成蹊大学アジア太平洋研究センターのプロジェクトの成果本『アメリカン・ヴァイオレンス』の出版(2013 年 6 月)を挙げておきたい。研究代表者の下河辺が編集責任者の一人となっており、下河辺、巽、日比野が寄稿している。各論考はモンロー・ドクトリンとアメリカ社会とへの洞察が込められたものとなっている。

また、2014 年 3 月 29 日の最終シンポジウムで四人が発表した原稿を中心として『21 世紀のモンロー・ドクトリン』(仮題)という論文集を著書として出版する企画が進行中である。

\*

本研究の目的は、一義的には、モンロー・ドクトリンの政治的、歴史的、文化的意味を解明し、アメリカ国家の歴史をあらたな面から見直すことであった。しかし、その裏には、モンロー・ドクトリンというレトリックの行為遂行的効果が現在のアメリカをどのように形成し、それが惑星としての地球においてグローバル化という現象にどのような形で表れているかをさぐることで、21 世紀世界への提言をするというもう一つの目的があった。学会のみならず、社会への発信の効果は即座には確認できるものではないとは言え、各方面からこのプロジェクトに寄せられる反応を聞くにつけ、人文研究が社会へ言葉を届ける可能性についてさらなる確信を得たことを付け加えておきたい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(全 41 件中 21 件)

下河辺美知子、「21 世紀における惑星的理想力：globe の濫用についての一考察」『成蹊大学文学部紀要』、査読有、49 号、2014、173 - 187。

下河辺美知子、「グローバル化の中の人文：魅惑する時間と偽りの約束」『成蹊英語英文学』、査読有、17 号、2014、1 - 16。

日比野啓、「二重化される意識と『もの』としての世界：Arthur Miller, *Death of a Salesman* における気づきの体験」『成蹊人文研究』、査読有、22 号、2014、1-18。

日比野啓、「(小声で言ってみる) アメリカの新しい音楽劇について」『文学』、査読無、15 巻第 2 号、2014、99-115。

下河辺美知子、"Infectious Terror in 'Edward Randolph's Portrait' : Transatlantic Threat and the Monroe Doctrine"、『成蹊英語英文学』、査読有、17号、2013、1-11。  
下河辺美知子、「傷と声：ポール・ド・マンにとって言語とは何だったのか」、『思想』、査読無、1071号、2013、75-95。  
巽孝之、「電腦以後の南部 ポー、フォークナー、ダニエレブスキー」、『フォークナー』、査読無、2013、15号、17-34。  
巽孝之、"Planet of the Frogs: Thoreau, Anderson, and Murakami"、*Narrative*、査読有、2013、21巻3号、346-56。  
巽孝之、「選民国家の選挙文学史序説 マザー、ホーソン、バーコヴィッチ」、『アメリカ研究』、査読有、2013、48号、1-19。  
巽孝之、「盗まれた廃墟：アウエルバッハ、ド・マン、パリッシュ」、『思想』、査読無、1071号、2013、57-74。  
舌津智之、「抒情と社会意識——ウィリアムズの一三〇年代」、『アメリカ演劇』、査読有、24号、2013、3-22。  
下河辺美知子、「モンロー大統領は『ドクトリン』を提示したのだろうか？：第七次年次教書の精神分析的解読」、『成蹊英語英文学』、査読有、16号、2012、1-18。  
巽孝之、「自伝というパラドックス」、『マーク・トウェイン 研究と批評』、査読無、11号、2012、9-13。  
舌津智之、「嗅覚の彼岸——『響きと怒り』における欲望と身体」、『フォークナー』、査読無、14号、2012、24-36。  
舌津智之、「テネシー・ウィリアムズと英米詩—『ガラスの動物園』再考」、『IVY』(名古屋大学英文学会) 査読無、45巻、2012、55-73。  
下河辺美知子、「暴力と救済：アレントからデリダをへて 21世紀世界の新たなるレトリックを求めて」、『人文・自然研究』、査読無、5号、2011、231-255。  
下河辺美知子、「盲目と閃光：視覚の病としてのトラウマの原点には爆発がある」、『成蹊英語英文学』、査読無、14号、2011、61-70。  
巽孝之、"Race and Black Humor: From a Planetary Perspective"、*Journal of the Fantastic in the Arts*、査読有、21巻3号、2011、439-54。  
巽孝之、「アメリカ文学の面白さ：『白鯨』を読む」、『英文学論考』、査読無、38号、2011、26-33。  
巽孝之、"The Myth of Simultaneous Order: Twain, Faulkner and Eliot"、*Mark Twain Studies*、査読有、3号、2011、64-77。  
舌津智之、「象とトランペット：『ダンボ』の深層」、『モンキービジネス』、査読無、13号、2011、268-294。  
巽孝之、"Race and Black Humor: From a Planetary Perspective"、*Journal of the Fantastic in Arts*、査読無、21巻3号、2011、439-459。

舌津智之、「『アメリカン・ルネサンス』再考」、『ソフィア』、査読無、58巻4号  
2010、11-51。  
〔学会発表〕(全65件中計27件)  
下河辺美知子、"Legacies of Paul de Man in 21st-century Criticism," The 11th Annual Conference of PAMLA, November 1, 2013, San Diego, USA.  
巽孝之、"Mark Twain: The View from Japan," The 48th Western Literature Association Conference, October 10, 2013, Berkeley, USA.  
巽孝之、"Planetary Coincidences: Melville, Salinger, Vizenor," The UCLA Department of English and the Program for the Study of the Contemporary, October 8, 2013, UCLA, USA.  
下河辺美知子、"The Encantadas' as a Textual Archipelago: Leaving / Being Left in Antebellum America," Ninth International Melville Conference, June 7, 2013, George Washington University, USA.  
巽孝之、"Lincoln's Bullet: Somewhere between the Civil War and the Jazz Age," Ninth International Melville Conference, June 4, 2013, George Washington University, USA.  
舌津智之、"Homoerotic Sea-Pieces: Herman Melville, Hart Crane, and Hampton Roads," Ninth International Melville Conference, June 4, 2013, George Washington University, USA.  
日比野啓、「Biffはなぜ Bill Oliver の会社が十一階であることを語るのか *Death of a Salesman* における身体への『気づき』の感覚」日本アメリカ文学会全国大会、2013年10月12日、明治学院大学。  
下河辺美知子、"The Monroe Doctrine and Dual Representation of 'America as Island and Continent,'" October 20, 2012, The Pacific Ancient and Modern Language Association, Seattle University, USA.  
巽孝之、"Nuclear Imagination in the Wake of Tsunami/Fukushima," The 70th World Science Fiction Convention, September 2, 2012, Chicago, USA.  
下河辺美知子、"Infectious Terror in 'Edward Randolph's Portrait': Transatlantic Threat to the Colonial/Revolutionary Period of America," The Nathaniel Hawthorne Society, June 10, 2012, Florence, Italy.  
舌津智之、「テネシー・ウィリアムズと英米詩」名古屋大学英文学会クリスマスセミナー、2011年12月9日、名古屋大学。  
巽孝之、"Planetary Postmodernisms," Association for the Study of the Arts of the Present 3, October 29, 2011, Pittsburgh, USA.

下河辺美知子、「自らがテロリストである可能性」ナサニエル・ホーソーン「総督官邸に伝わる物語」における暴力と恐怖」日本アメリカ文学学会全国大会、2011年10月8日、関西大学。

舌津智之、「フォークナーと身体表象」日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会、2011年10月7日、関西学院大学。

巽孝之、「Whatever Happened to Cyberpunk? (Oh Wait, it is Still with Us...)」The 69<sup>th</sup> World Science Fiction Convention, August 21, 2011, Reno, USA.

日比野啓、「The Work of Theatre Art in the Age of Mechanical Reproduction: Hirata Oriza's Scientific Mind,」International Federation for Theatre Research, Annual Conference, August 11, 2011, Osaka Univ.

舌津智之、「テネシー・ウィリアムズ研究の現在」日本アメリカ演劇学会年次大会、2011年7月3日、浅草ビューホテル。

巽孝之、「ゼロ年代のアメリカ文化」アメリカ学会年次大会、2011年6月5日、東京大学駒場キャンパス。

日比野啓、「『地獄のオルフェウス』(1957)再読」日本英文学会関東支部春季大会、2011年4月30日、成蹊大学。

巽孝之、「Contemporary Japanese Popular Culture,」Department of Culture Studies and Oriental Languages, University of Oslo, March 18, 2011, University of Oslo, Norway.

巽孝之、「Panic Japanesque, Pax Exotica,」Open Workshop on Popular Culture, March 26, 2011, Department of Oriental Languages, Stockholm University, Sweden.

巽孝之、「アメリカン・ルネッサンスの物語学」日本英文学会九州支部大会、2010年10月31日。九州大学箱崎キャンパス。

巽孝之、「アメリカ南部の惑星思考」モンロー・ドクトリンと文学研究」宮崎大学教育文化学部講演会、2010年10月29日、宮崎大学。

巽孝之、「Ninja and Ninjette: Toward the Theory of Planetary Iconology,」Conference on "Borderlessness and Youth Culture in Modern Japan,」October 15, 2010, McGill University, Canada.

巽孝之、「Planetary and American Literary Studies,」Tocqueville Summer Institutes, June 10, 2010, University of Richmond, USA.

下河辺美知子、「バーバラ・ジョンソンの遺産：21世紀グローバル・コミュニティにおける「差異」」アメリカ学会、2010年10月10日、立教大学。

日比野啓、「Aesthetically Challenged America」*Dancer in the Dark* (2000)におけるアンチ・ミュージカルのモメント」日本アメリカ文学学会東京支部月例会、2010年5

月14日、慶應義塾大学。

〔図書〕(全31件中計15件)

下河辺美知子、彩流社、『アメリカン・ヴァイオレンス—見える暴力・見えない暴力』、2013、7-35 および 65-89。

巽孝之、岩波書店、『モダニズムの惑星』、2013、280。

巽孝之、彩流社、『アメリカン・ヴァイオレンス』、2013、255-279。

巽孝之、開文社出版、『アメリカン・ルネッサンス 批評の新生』、2013、127-47。

舌津智之、臨川書店、『あめりか いきものがたり—動物表象を読み解く』、2013、231-251。

舌津智之、松柏社、『アメリカ文学のアーリー・ロマンス・大衆・文学史』、2013、198-224。

日比野啓、彩流社、『アメリカン・ヴァイオレンス』、2013、147-172。

巽孝之、彩流社、『カート・ヴォネガット』、2012、1-7 および 82-101。

舌津智之、開文社出版、『水と光—アメリカ文学の原点を探る』、2013、121-137。

舌津智之、立教大学出版会、『ジェンダー研究の現在—性という多面体』、2013、123-140。

巽孝之、彩流社、『越境する言の葉：日本比較文学会60周年記念論文集』、2011、111-119。

巽孝之、慶應義塾大学アートセンター、『ゴジラとアトム：原子力は「光の国」の夢を見たか』、2012、49-64。

巽孝之、新書館、『幽霊学入門』、2010、52-65。

舌津智之、Nan 'un-do, *Melville and the Wall of the Modern Age*、2010、39-55。

〔その他〕

ホームページ

<http://md.shimokobe.net>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

下河辺美知子 (SHIMOKOBE, Michiko)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：20171001

### (2) 研究分担者

巽孝之 (TATSUMI, Takayuki)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：30155098

舌津智之 (ZETTSU, Tomoyuki)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：40262216

日比野啓 (HIBINO, Kei)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：40302830